

執筆者紹介

劉^{りゅう} 文兵^{ぶんべい} 本研究所客員研究員

主な著書（単著）：

- 『日本電影在中国』（中国語、中国電影出版社、2015年）
 - 『중국영화의열광적황금기』（韓国語、劉文兵著、홍지영訳、sanzini 出版社、2015年）
 - 『中国抗日映画・ドラマの世界』（祥伝社新書、2013）
 - 『中国映画の熱狂的黄金期』（岩波書店、2012）
 - 『証言 日中映画人交流』（集英社新書、2011）
 - 『中国 10 億人の日本映画熱愛史』（集英社新書、2006）
 - 『映画のなかの上海』（慶應義塾大学出版会、2004）。
- 共著、論文多数。

森^{もり} 宏^{ひろし} 本研究所研究参与

〈編集後記〉

『専修大学社会科学研究所月報』No. 627 は、劉文兵所員の「満州映画史研究に新しい光を——「満州国」における日本映画の上映と受容の実態」と、森宏所員の書評「荒幡克己『減反廃止：農政大転換の誤解と真実』（日本経済新聞出版社、2015年7月）を読んで—」を掲載することとなった。劉論文では、従来の中国側での研究では日本映画のプロパガンダ効果が誇張されてきたのであり、実際は一般の中国民衆にはまったく浸透していなかったという。恥ずかしながら満州映画といえば甘粕大尉と李香蘭の名前ぐらしか浮かばないが、改めて確認してみると李香蘭こと山口淑子氏は2014年9月7日に逝去されたとのことなので、社研月報9月号から数えるとちょうど一年前ということになる。これも何かのご縁というべきか。合掌。他方、森所員の書評論文は、日本の減反政策の「迷走の40年をムダにするな」と帯に掲げているという著書を取りあげている。米消費は着実に年々8.0万トンずつ減っているというが、1人当たりの米消費量も1963年度の117kgが2011年度58kgと半減し、いまや農業就業者割合も3%程度となっている。戦後すぐの頃には日本人の半分が農民で、日本人皆がせっせと米を食べていたのだから、驚くべきスピードでまったく別世界へと変貌を遂げてしまったわけである。そうした急激な社会構造の変動過程の中であって、日本政府による農業政策が迷走を余儀なくされたというのも、ある面では仕方がなかったということになるのであろうか。

(n/s)

2015年9月20日発行

神奈川県川崎市多摩区東三田2丁目1番1号 電話 (044)911-1089

専修大学社会科学研究所

The Institute for Social Science, Senshu University, Tokyo/Kawasaki, Japan

(発行者) 村上俊介

製作 佐藤印刷株式会社

東京都渋谷区神宮前2-10-2 電話 (03)3404-2561
